I-4

日本の美術館建築の無料域における「開き方」に関する研究
－室名の変化と多様化を通して－
Study of the public open design for Free-area at art museum in Japan
-Trough change and diversification of the room names-

○小笠舞穂[1]，　佐藤慎也[2]
*Maiho Ogasa[1], Shinya Satoh[2]

Abstract: In 1977,it is proposed "Musée Ouvert" by Pompidou Centre,France. Scince then,many art museums in Japan ware designed based on it.In this study,I define that the place where is admission-free and even anyone could enter as "a Free-area",and through a study of a change and the diversification of the room or garden name, I investigated the process of the design of how to open Japanese art museums.As a result of this study,it becomes clear after the 1980s to have a room and the garden which are more various than the before 1970s in the free area and that it evolved while demand to the new display space that needs and the work of the citizen who was a user demanded was reflected.

1. 研究の背景と目的

「開かれた美術館」[注1)]という理念は広く美術館の理想とされてきた。市民または都市に開かれた美術館として、様々な付加施設を複合的に併設させるハードの変化に加え、ワークショップ（以下 WS）や講座の開催などソフトの取り組みも積極的に行われている。そんな中でかつての理想は、現在の社会では必要条件となりつつあり、美術館は「開くべき」という考えが広くもたれている。近年では，「普段着のまま訪れる美術館というコンセプトが広く使われるようになってきた」[注2)]ことで、美術分野へ関心が高い層ばかりだった利用者も大衆化しつつあり、滞在や利用への要望の多様化は留まることなく進み続けている。

このような状況から入場料を払わずに誰もが利用することが可能な、エントランスホールやカフェ、ショップ､WS 室のような「無料域」の重要性が高まっている。当初はあくまでも美術館にとって付加的な存在であった無料域に属する場は、主体となるものの一部となりつつある。美術館建築がもはや作品を見るためだけの場ではなくなった今、日本における美術館の無料域における「開き方」を調査し、試みられている「開く」 デザインについて明らかにしたい。

本研究では、国内の美術館建築のうち、入場料が必要なく誰でも入ることができる領域を「無料域」と定義し、そこに設置されている室名の歴史と現状を明らかにする。それらは従来の美術館の機能に対し、時代における付加的な機能の変化を反映するものであり、その調査を通して、内容が曖昧で安易に用いられやすい「開かれた美術館」への建築的アプローチを明らかにすることを目的としている．

2. 既往研究

美術館展示室に関する技術進歩に伴う変化は多くの論文で取り上げられているが、展示室外のエリアに関する研究は少ない。その中で､前川國男のロビーの意匠に関するもの[3)]､エントランス利用者の行為に着目し滞留の様子を明らかにしたもの[4)]、ショップやカフェの設置状況に関するもの[5)]など、無料域である場所を対象にしたものはあるが、広く実態を調査したものはなかった。

3. 研究の対象と方法

国公立美術館を中心に組織されている美術館連絡協議会に 2015 年 4 月時点で加盟している 141 館に加えて、規模や運営形態にとらわれず組織されている全国美術館会議に同じく 2015 年 4 月時点で加盟している 379 館の合計 399 館（うち 121 館重複加盟）を対象とした。各施設について文献・ホームページ・パンフレットを用いて、名称 / 所在地 / 複合する施設の有無 / 開館年または大規模改修の完了年 / 平面図 / フロアガイド / 室名 / 室の使われ方を調査した。

4. 研究の結果と考察

本研究における「無料域」は、①入場料を払わずに入ることができる②だれでも自由に利用できる③通過するだけではない場所と定義する。以下の結果は、無料域の室名と平面構成について調査を行い、結果を得られた 263 館に関するものである。

4-1. 無料域の活動と分類

対象美術館の無料域に属する場の名称を全て挙げ、(i) その場における専門性の高さ (ii) 利用料金の程度によって、芸術活動系統のみ 3 つに細分化し、合計 10 系統に分類した（表 1)。しかし分類が明確にできなかったにものもあり、茶室やこども関係の室名などについてはその他に分類している。

1：日大理工・院（前）・建築　2：日大理工・教員・建築

4-2. 無料域の変化と現状

対象である 263 館の開館年または大規模改修の完了年を調査し（図 1)、これをもとに、4-1 で分類した 10 系統の有無の割合をまとめた。（図 2)

ほとんどが増加傾向にあることがわかり、無料域のニーズの高まりと、その多様化がわかる。特に①の玄関系統と⑧の創作 / 体験系統、⑨のショップ系統は顕著な増加が見られ、①と⑨においては 2010 年以降に 80% を超える美術館に設置されており、今日の開き方の主流となっていると考えられる。①は作品の多様化に伴い発表の場として用いられる事例もみられた。⑧においては、70 年代以降に登場した新しい系統であり、これから①や⑨のように増加していくと予想され、アートを見るだけではなく、自ら体験する意識が高まっているためと考えられる。

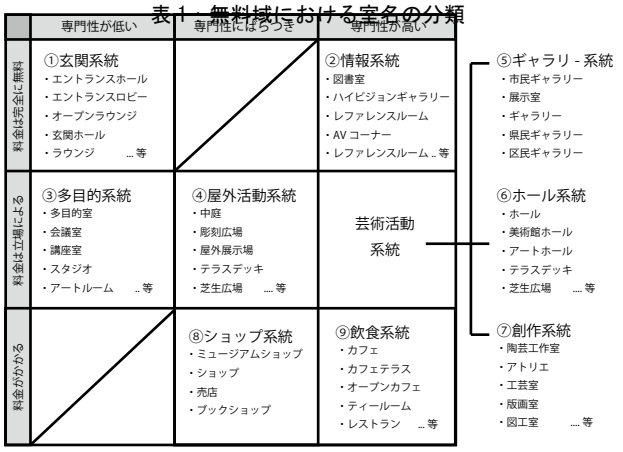
一方で、②の展望系統は , 80 年代をピークに減少しているが、これは地方や郊外において大規模な公園と複合した美術館が多かったのに対し、その後は駅前や都心における再開発の一部とされるものが増えたこととの関連があると考えられる。

また、⑥、⑦、⑧は市民が発信する側として , 利用料金を支払い自ら活動することができるものである。このうち、ホール系統だけにやや減少傾向がみられる。この原因として、残りの 2 つに対してホールは建築的な機能上の拘束が強く。利用者の使い方の幅が狭められていることが考えられる。

5. 結論とまとめ

10 系統に分類したものの、内包する室名は年を追うごとに増加しており、これらの分類に当てはまらない新しい計画も増加している。ハードに捉われたもの（ホール、飲食など）よりも、使用の時々や人数などに合わせて自由に使用が可能なもの（多目的室、エントランスホールなど）が増加していることから、近年では「開かれた美術館」という、市民やまちとアートの関わりに対する計画が受け入れられつつある状況にあると考える。

表 1：無料域における室名の分類



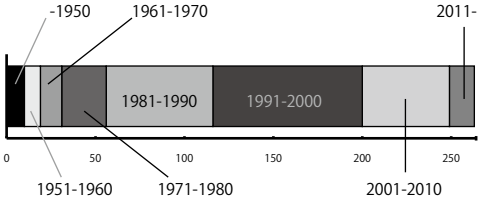


図 1：開館年または大規模改修の完了年

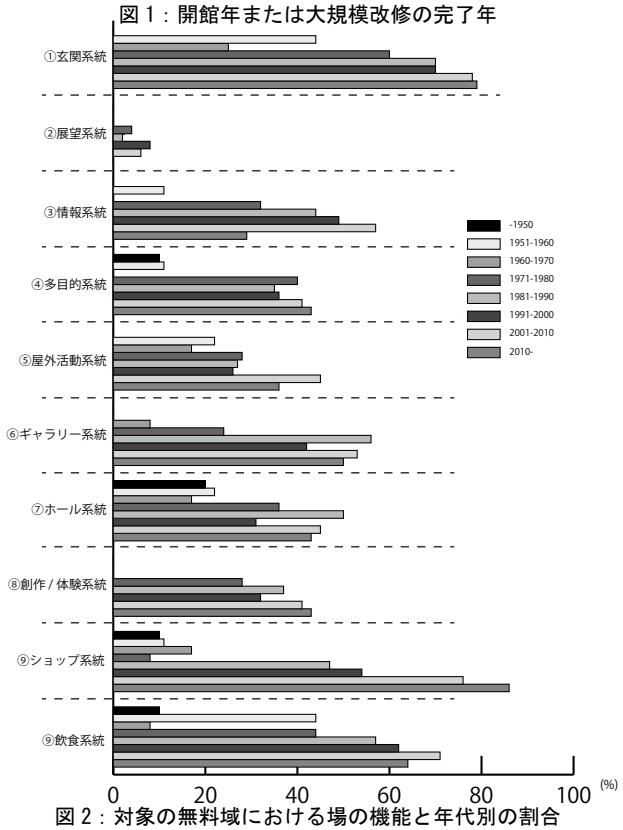


図 2：対象の無料域における場の機能と年代別の割合

【脚注】

(1) 1977 年に開館したパリのポンピドゥー・センターが提唱した理念。73 年には , その準備のため「開かれた美術館」討論・研に究会がバーゼル・クンストハルで開催された。

(2) 金沢 21 世紀美術館開館時、キュレーターである長谷川裕子が語った言葉。

(3) 真木利江・高橋智彦・乙村雅人：前川國男設計の美術館・博物館建築におけるロビー空間の構成手法 , 山口大学工学部研究報告 58(2), PP37-43, 2008 年 3 月

(4) 鈴木祐美・仙田満・佐々木省悟・井上寿：利用者の行為からみた美術館のエントランスホール・ロビーに関する研究 , 日本建築学会学術講演梗概集 PP115-116, 1998 年

(5) 野口智子・曽根陽子 :「美術館に付属する喫茶店・レストラン・ミュージアムショップに関する研究」, 日本建築学会学術講演梗概集 377-378, 1996

【参考文献】

(1) 酒井忠康 監修：美術館と建築 , 青幻舎 , 2013 年 10 月

(2) 枡田倫広・新藤淳 :NO MUSEUM,NO LIFE?, 独立行政法人 国立美術館 , 2015 年 4 月

(3) 美術手帖 10 月号増刊 21 世紀のミュージアムをつくる , 美術出版社 , 2004 年 10 月

(4) 平田オリザ：新しい広場をつくる , 岩波書店 , 2013 年 10 月

(5) 横山勝彦 + 半田滋男・高橋紀子：美術検定美術実践キーワード 88, 美術出版社 , 2008 年 6 月